



の業務に携わっています。職員ひとりひとりの声を取りあげ、図書館の運営に反映させていくために、平成11年度からコーディネーター制を取り入れました。それぞれの業務で1名ないし2名、計5名がコーディネーターとなり、事実上の責任者として職員を取りまとめています。

業務の現場で何か問題が起きると、コーディネーターを中心に話し合います。「若い職員は、直接自分の意見を言うことがなかなかできないのです。そういう意見を私たちが取りあげて、上にあげたほうがよい問題は上にあげる。上下の意思疎通がスムーズにいくように考えています」と、コーディネーターでもある武藤係長はおっしゃいます。そのようにして取りあげられた問題は、館長と副館長、事務室長補佐とコーディネーター全員が相談して対応します。その際には、それぞれの現場の代表であるコーディネーターの意向ができるだけ尊重されます。図書館の方針や通達なども、コーディネーターを通して職員ひとりひとりに行き



渡ります。「コーディネーター制になってから職員どうしのコミュニケーションが活発になりました」(武藤係長)。

四庫全書をはじめとする三大叢書が揃う

文学部での研究活動は「原典にあたる」ことが重視されるため、文学系の大学図書館は国文学、英米文学の資料を豊富に揃える必要があります。愛知淑徳大学図書館も例外ではありません。4層の書庫や閲覧室の書架には、中世から



近・現代の国文学や英米文学、ロシア文学の資料がぎっしり並んでいます。

なかでも中国文学関係の資料の豊富さは、訪れる人が皆驚き

の声を上げるほどです。四庫全書(*4)をはじめとする三大文庫が揃うのは、日本の大学でもごく少数です。

これらの資料を整理し目録を作成するのは、たいへんな作業です。中国語やロシア語のわかる留学生などに臨時に作業してもらい、目録を作成することもあるそうです。

(*4) 四庫全書：清朝、乾隆帝のときに完成した叢書の名。

全学から信頼される図書館へ

LIMEDIOの導入にあたっては「基本的な図書館として持つべき機能を決め、ひとつひとつ具体的に列挙して企画書を作りました」(システム担当の杉山麻里さん)。それにプラスして新しいものを取り入れていけるようにと考えています。「今は中間段階だと思っています。現状に甘んじてはいけません。常に現実を踏まえつつ、先にある夢に向かって進んでいくというのが基本的な方針なのです」と逸村副館長はおっしゃいます。

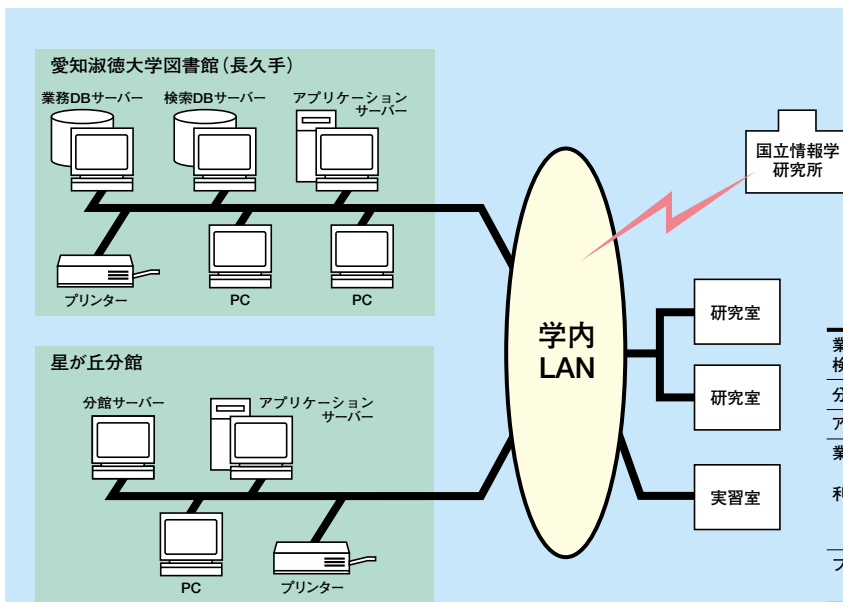
梅村敏郎館長は、「図書館が全学から非常に信頼されるように。そこに行けば、自分たちの勉強のことを積極的に助けてくれるという信頼感を全学で得られるような仕事を図書館の皆さんにしてもらえれば。そのために、できることからやっていきたいと思っています」とおっしゃいます。将来を見据えた図書館の取り組みに、期待が寄せられています。

【この記事は2000年11月1日の取材に基づいています】



左から、梅村館長、逸村副館長、コーディネーターの武藤係長、鹿島さん、杉山主任、四谷さん

■図書館システム構成



LIMEDIO導入 1999年10月

ユーザー数	奉仕対象	6,924人
	図書館職員(専任・嘱託)	15人
データ量	蔵書数(図書)	260,888冊
	蔵書数(雑誌)	1,490種
	年間受入数(図書)	14,580冊
	年間受入数(雑誌)	1,080種

*ユーザー数、蔵書数は2000年3月31日現在のもの、年間受入数は1999年度のデータ。

		図書館	星が丘分館
業務DBサーバー	GP7000S model25	1式	
検索DBサーバー	GP7000S model25	1式	
分館サーバー	GP7000S model5		1式
アプリケーションサーバー	GRANDPOWER5000 model280	1式	1式
業務用端末	FMV6450CL3	20台	4台
利用者検索用端末	FMV6600CL4e	3台	
	FMV6433DX3c	1台	
	FMV6400CL3c	12台	6台
	FMV6500CL4c		1台
プリンター	RICOH IPSiO NX700	3台	1台
	RICOH IPSiO NX70	7台	2台